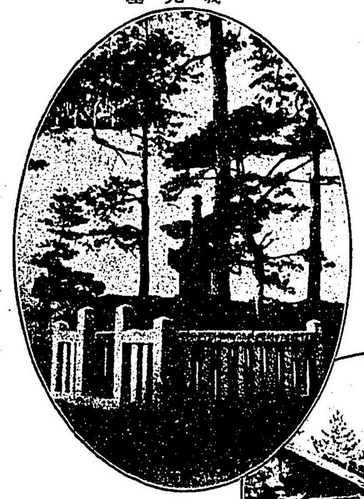
奇跡の法

忠歌

戊申春
東仰書

かゑらしさかれて
おもへは梓弓
なき歌に入
名をそ
とゝむる

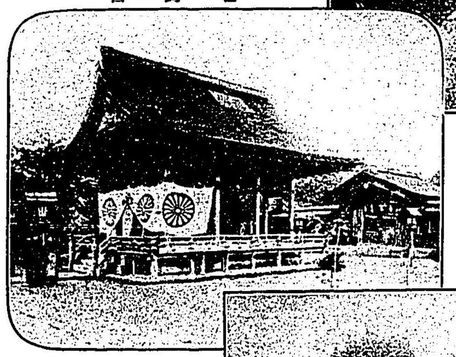


義光墓

大橋

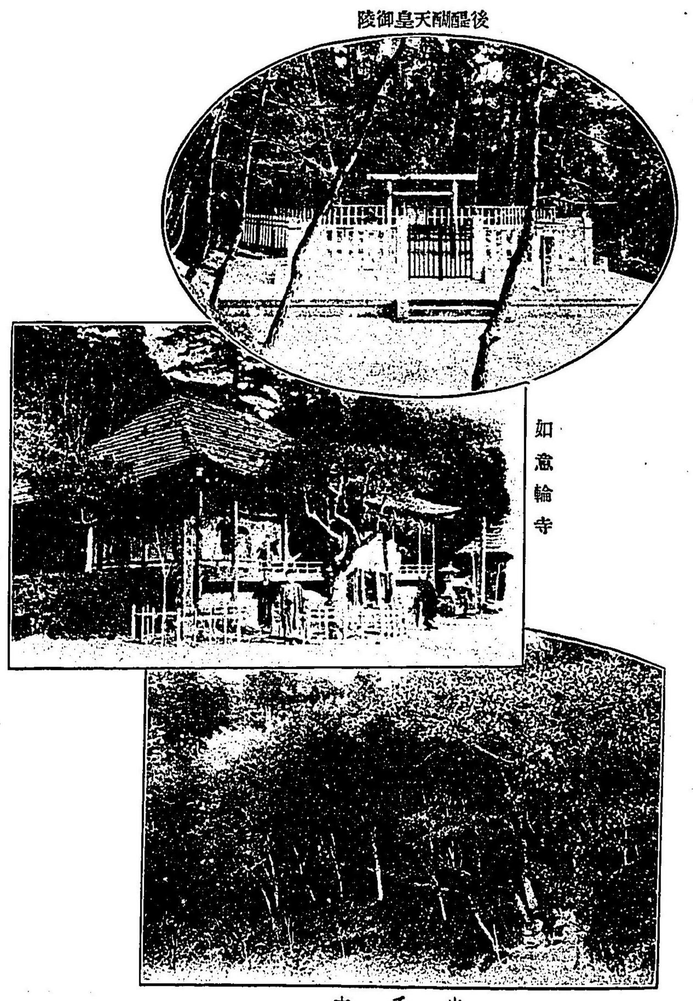
吉水神社

縣長



宮野吉

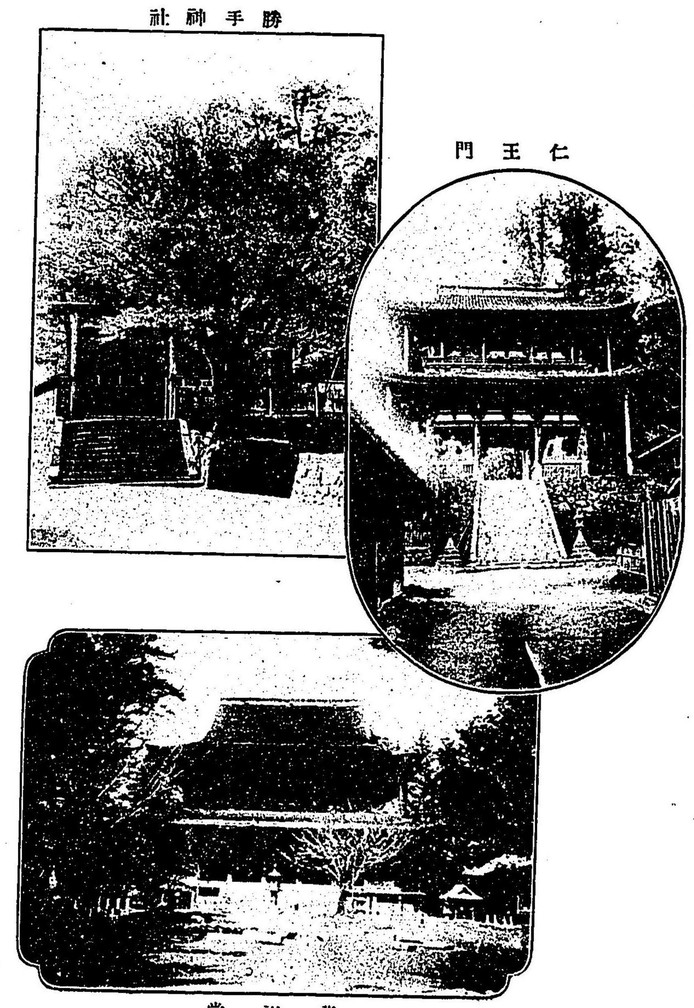
千本下



後醍醐天皇御陵

如意輪寺

中千本



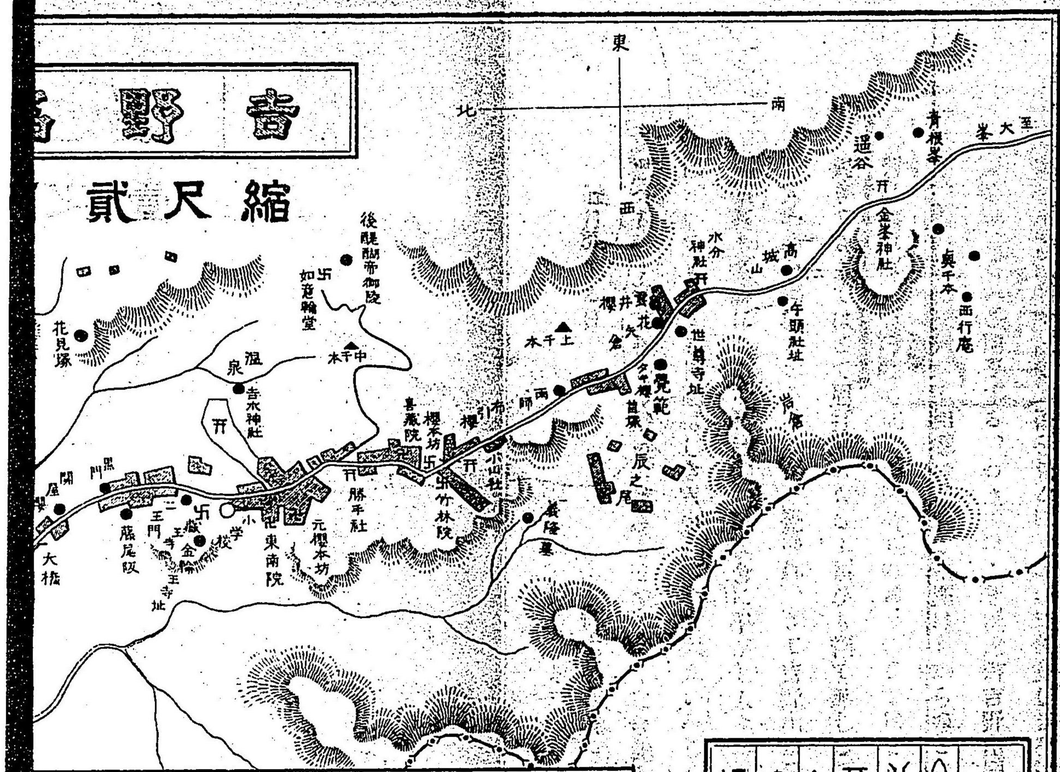
勝手神社

仁王門

藏王堂

吉野山

縮尺貳



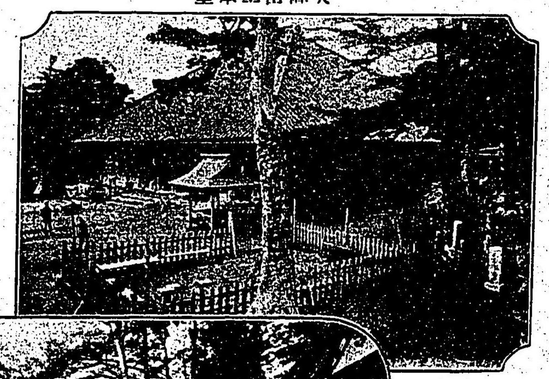
凡例

渡船場	橋梁	神社	公園	名所故蹟	寺院

小學校ヲ起點トシタル

里程表

柳渡(六田)	四十	丁
吉野宮	二十三	丁
下		
義光墓	十二	丁
下千本	十	丁
銅鳥居	四	丁
二王門	一	丁半
金輪王寺址	一	丁半
藏王堂	半	丁
吉水院	二	丁半
勝手神社	三	丁半
義隆墓	九	丁
中千本	七	丁
藤尾御陵	十	丁
如意輪寺	二	丁



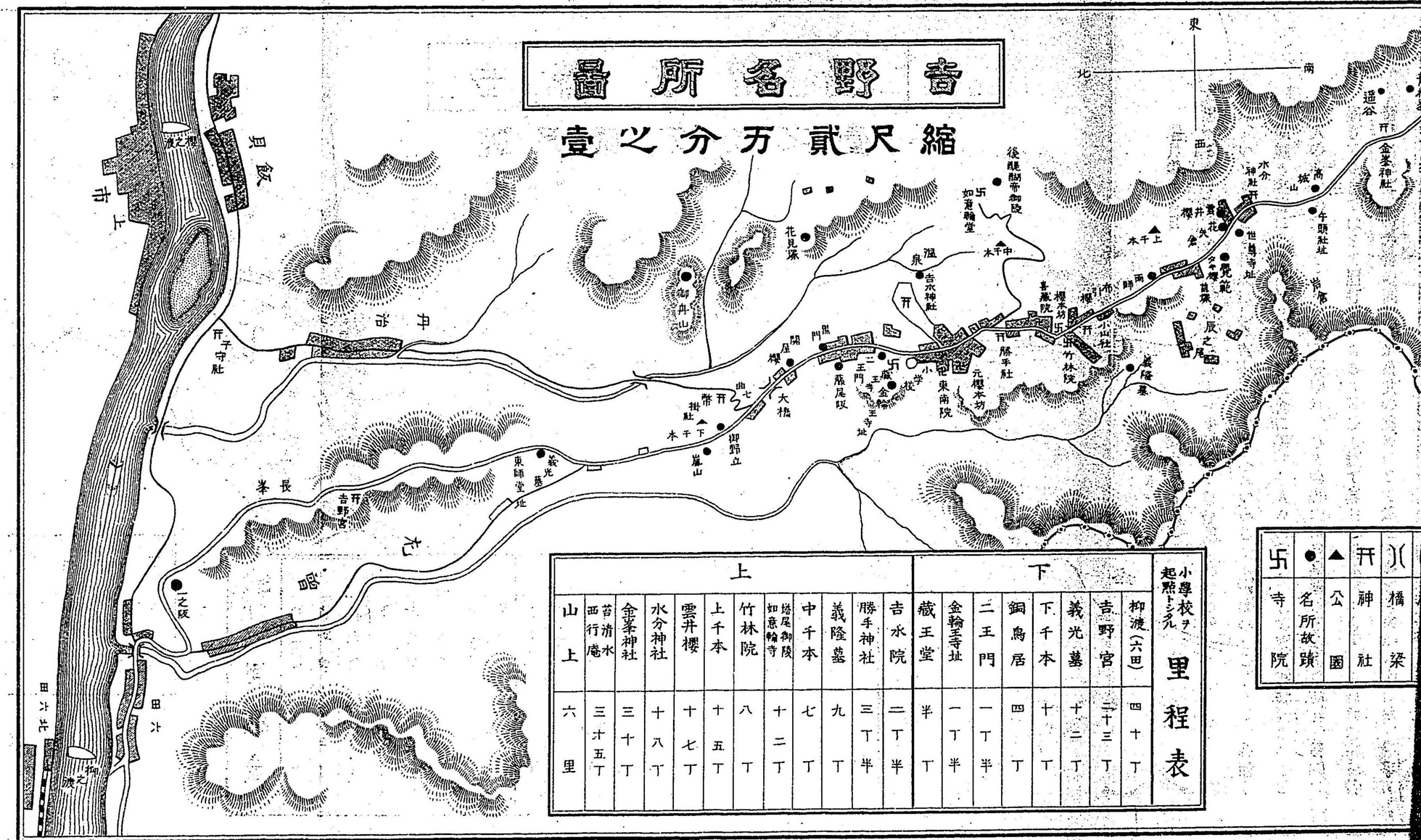
大峰山上本堂

水分神社

竹林院庭

吉野名所圖

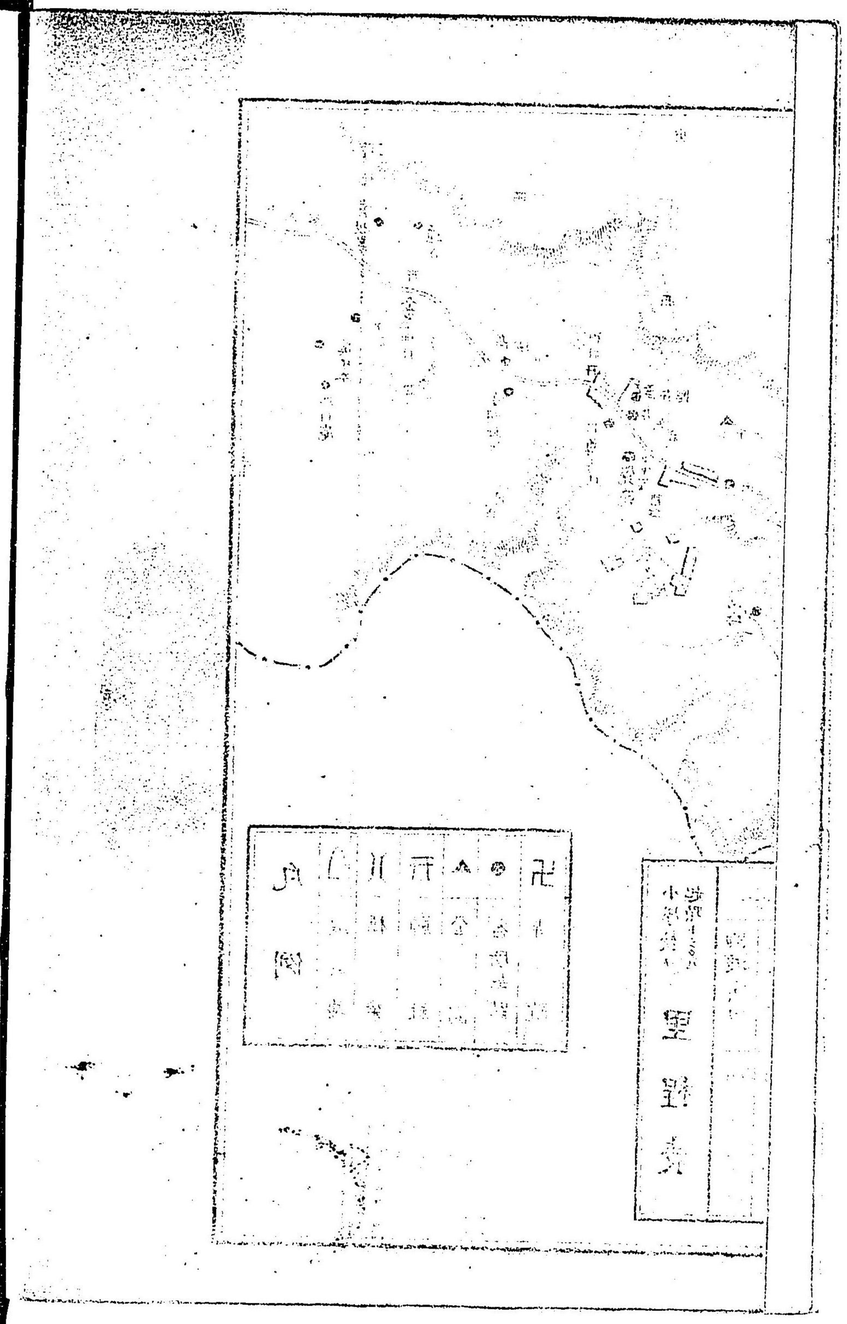
縮尺貳万分之壹



小學校ヲ起點トシタル 里程表		
柳渡（六田）	四十丁	
吉野宮	二十三丁	
義光墓	十二丁	
下千本	十丁	下
銅鳥居	四丁	
二王門	一丁半	
金輪王寺址	一丁半	
藏王堂	半丁	
吉水院	二丁半	
勝手神社	三丁半	
義隆墓	九丁	
中千本	七丁	
塔尾御陵如意輪寺	十二丁	
竹林院	八丁	上
上千本	十五丁	
雲井櫻	十七丁	
水分神社	十八丁	
金峯神社	三十丁	
苔清水西行庵	三十五丁	
山上	六里	

橋梁	神社	公園	寺院
川	開	▲	●
			卐

339-45



序

世の中に名勝舊跡の美せる書ども多にあれど、簡なるは要を失ひ、繁なるは讀むにたよりよからず、能く其中庸を得つるはなか〳〵に有難てになむ、今し中岡清一大人が物せる吉野名所誌といふ書を見るに、げに繁簡宜しきを得てさながら名工の筆に成れる畫幅を見るの心地をする、わきて嬉しきは此書吉野山同窓會の刊行に係ることなり。人の世は推列べて相應はしきと相應はしからぬとによりて、馆業の品定めらるゝ者人なれば、世の常の同窓會が公共の爲めにとて爲せる事ども多かる中には、好事に過ぎてさまではとて眉打顰めらるゝ類ひも絶て無しと云ふべからず、これなむ事を幹る人の心を傷むるところとこそ覺ゆれ、さて吉野山は我皇國は云ふも更なり、異國にも類無き名勝にしあなれば、其が校舍に學びし人々の事業として斯る書發兌さんことは、いともいとも相應はしき吉事にて中岡大人いみじくも選ばれしことよと、心憎く思へるまゝ序言をとの需めに辭みもせず、斯くなむ記しつけつ。

瑞月の足る日　　吉野山南行庵にて　　石衣叟

45.3.25
内交

例言

一、本書は吉野觀光の利便に供せんため、吉野山小學校同窓會の事業としてなれるものであるが、余元より淺學菲才、到底粗漏杜撰なきを得ない、幸に識者の高敎を賜ひたい。

一、吉野名所誌は全々吉野歴史でない、歴史は正確考證を要するが、古蹟名勝は口碑傳說になれる場合がある、故に本書記事中、間々玉石混淆荒誕無稽のものあるを免れない、只見る人の感想を養ふの方便になれば幸である、

一、本書を草するに當り、參考とした書籍記錄舊記等尠なくないが、煩を厭ひて茲に列記しない、併し之等に就て種々便宜を與へられた諸君には、特に記して謝意を述べて置く。

一、本書は吉野探勝の順序として、山麓六田より次第を追うて、古蹟名勝を記述したるものであるから、途中の前後左右上下等は之に依りしものと知られたい。

編者識

地勢及位置

武藏秩父より西走して伊勢海を越ゑ紀和に亘り、遠く四國九州に連るもの之を秩父古生層と云ふ。吉野は此の地質によりて築かれたる吉野群山中、金峯山の中腹にあり、地形恰も馬背の如く吉野河畔より起り蜿蜒南二里に及び、後に盈々たる峯巒を背ひ、前に吉野の清流を帶び、土地高燥、四時の風光甚佳なり

沿革概要

吉野或は芳野と書し、上古之をゑしぬ、よしぬ、みゑしぬなどと云ひしが、これ當地方の汎稱にして、其の區域甚だ廣かりき。

又大峯の支脈なれば世に金御嶽、御金嶽、金峯山、國軸山等の稱あり。

神代既にこの地の名顯はれ、神武天皇熊野を經て大和に入り給ひし御時、吉野首の祖井氷鹿(井光)天皇を迎へ奉りたりと。降つて應神天皇吉野に巡狩せられ、尋で雄略齊明の二帝も此の地に御幸し給ふ。其の後役小角大峯山を開き修驗道を起すに及び、角乘角仁

等の名僧智識相次ぎて之を繼承し、大に斯道の普及興隆につとめしかば、寺院數多建立せられ、吉野の基礎は全くこゝに形つくられたり。

大海皇子一時世を遁れて當山に入り給ひしより、持統文武元正聖武の諸帝相次ぎて御幸あり、花に雪に歌を詠じ、君臣相與じ給ひて後永く遊覽の地とはなりき。

文治年間源義經、兄頼朝の疑をうけて暫くこゝに匿れ愛妾靜と一片の哀史を止め、元弘年間大塔宮、こゝに城きて北條の大軍を迎へ、村上義光父子難に殉じ芳名を千古にのこして以來、延元元年後醍醐帝、南遷して行宮をこの地に定め給ひて後、後村上後龜山の二帝相承け給ひ五十餘年間、時に行宮をかへさせ給ひしことあれど概ねこの地を皇居とせさせ給へり。

この間正平二年楠木正行一族郎黨と共に吉野廷に參內し、辭世を如意輪寺に止め、四條畷に敗死す。師直捷に乘じ、大擧吉野を襲ひしかば後村上帝神器を奉じて、賀名生に移らせ給ふ等、所謂歌書よりも軍書に悲しき吉野山とはなりぬ。文祿三年豐公、秀次家康等五千人を從へ當山に觀櫻すること五日間、和歌の會能樂の催あり、一代の豪奢をつくされたり、觀櫻の盛大は實に此の時を以て最とす。

慶長十九年德川家康、南光坊天海をして當山主寺金輪王寺を日光に移さしめ、これが支配地とせしより、事物皆學頭の與る所となり、漸次往時の盛況を失ひしが寺院は尙陰然勢力を有し、又花に月に文人墨客の來訪絕ゑ間なかりき。然るに一朝明治の政變に遭ひ破壞の風潮はこの僻地を襲ひ、寺院は殆ど破毀せられ、目下現存せるもの僅に數坊を數ふるのみ。

現今行政區劃により、吉野郡吉野村の一大字たり。戶數約四百、人口二千餘。

金峯山寺

役小角金峯山(大峯)を開き、修驗道を創始せしより以後、堂宇寺院數多建立せられしが元來大峯は嶮峻高峯にして、冬季積雪丈餘に及び冬籠の困難より、其の山續なる吉野山に假舍を置き、大峯護持の任に當りしが、吉野藏王堂をはじめ觀音堂講堂寺院僧舍百餘坊を數ふるに到れり。大峯本堂諸坊にこれ等を加へ總稱して金峯山寺といふ。

以後金峯山寺は諸國に數多の末寺と數萬の修驗者とを有し、上下の歸依信仰厚く、（後掲金峯山創草記參照）其の勢力强盛にして、當時交通不便なりし支那に迄も知らるるに至れり。

日本國都城南五百餘里、有金峯山、頂上有金金剛藏王菩薩、第一靈異、山有松檜名花軟草、大小寺數百、節行高道者居之、不曾有女人得上、至今男子欲上、三月斷酒肉欲食、所求皆遂云、菩薩是彌勒化身、如五臺文殊（義楚六帖）

後醍醐帝當山を皇居と定め給ひしを初めとし、忠臣烈士の事蹟に富み歷史上一段の光彩を添ふる所以亦實に茲に起因す。

其の後多くの寺院堂宇は屢兵燹に罹り、幾多の變遷を歷て其の名近時に存するもの左記の如し

（――を附記せるは現存せるもの）

藏王堂　大峯本堂　觀音堂　二王門　二月堂
彌勒堂　師子尾堂　藥師堂　二天門　大塔假堂
鐘樓堂　安禪寺藏王堂　四方正面堂　丈六山藏王堂　長峯藥師堂
講堂釋迦　世尊寺釋迦堂　二鳥居丈六堂　石藏寺觀音堂　常行堂
道圓寺講堂　吉水觀音堂　大塔　寶塔　多寶塔
蹴拔塔　牛頭宮　金精大明神宮　子守大明神宮　勝手大明神宮
佐拋大明神社　天滿天神社　八王子社　上宮　下宮
吉水院　東南院　喜藏院　大福院　知足院
新藏院　新熊野院　實相院　妙覺院　道光院
竹林院　成就院　寶生院　吉祥院　新住院
勝光院　蓮藏院　寶積院　福壽院　持福院
十方院　禪定院　千手院　遍照金剛院　金剛壽院
來迎院　不動院　延命院　釋迦院　藥師院
千光院　眞珠院　福島院　文珠院　小松院
眞藏院　寶塔院　寶泉院　多聞院　龍華院

保光院　清涼院　光藏院　寶藏院　持明院
心善院　密乘院　敎學院　如意輪寺　大日寺
大將軍寺　實城寺　大福寺　蓮臺寺　周遍寺
大聖寺　一乘寺　道光寺　南室坊　櫻本坊
岸室坊　上室坊　椿坊　池之坊　福井坊
坂中坊　角之坊　寶泉坊　福之坊　岩室坊
宗春坊　舞仙坊　宗學坊　裕春坊　松室坊
寶積坊　上之坊　喜久坊　西之坊　岩本坊
中室坊　藏坊　寶楠坊　松之坊　柳之坊
舞學坊　行織坊　乘順坊　舞瓦坊　笹之坊
前之坊　南之坊　松本坊　谷之坊　東之坊
杉本坊　久保坊　穀屋坊　岩之坊　辻之坊

櫻の由來

役小角大峯開山の時、吉野に櫻樹を植う、これ當山櫻の濫觴なり。小角里人に櫻は藏王權現の神木なりと稱して其傷害をいましめしかば、人皆之を恐れ樵夫すら之を伐らず、薪中にも其の一枝一葉をも交へざりき。斯の如き消極的方法と、爾後藏王權現に冥福を祈るもの饗するに櫻を以てせし積極的方法と、この兩方法が數百千年來永續して愈增殖し、遂に雲井櫻布引櫻瀧櫻馬場櫻苔清水遙谷千本櫻花塚等其の絕美を極め、貞室をしてこれはこれはと驚嘆せしめ、知紀をして見ゆる限は櫻なりけりと絕叫せしむるに至りしなり。然るに惜むべし、明治維新に於ける破壞の風潮は、心なき里人をして濫伐に濫伐を重ねしめ、一時見る影なき衰態を來たせしが、近時區民漸く覺醒し官民銳意其の保護と增殖とをはかりしかば、漸く現狀を呈するに至れり

天武天皇の御製

淑人のよしとよく見てよしといひし吉野よくみよよき人よく見つ

西行法師

吉野山去年の枝の道かへてまだ見ぬ方の花をたづねん

人は武士柱は槍魚は鯛小袖は紅梅花はみよしの　一休和尚

むかし誰かゝる櫻の種を植ゑて吉野を春の山となしけん　後京極攝政良經

名に高きよしのの山の花よりや雲に櫻をまがへうめけん　藤原俊成

梅と櫻と吉野へ行たら梅は酸いとて戻された　俗謠

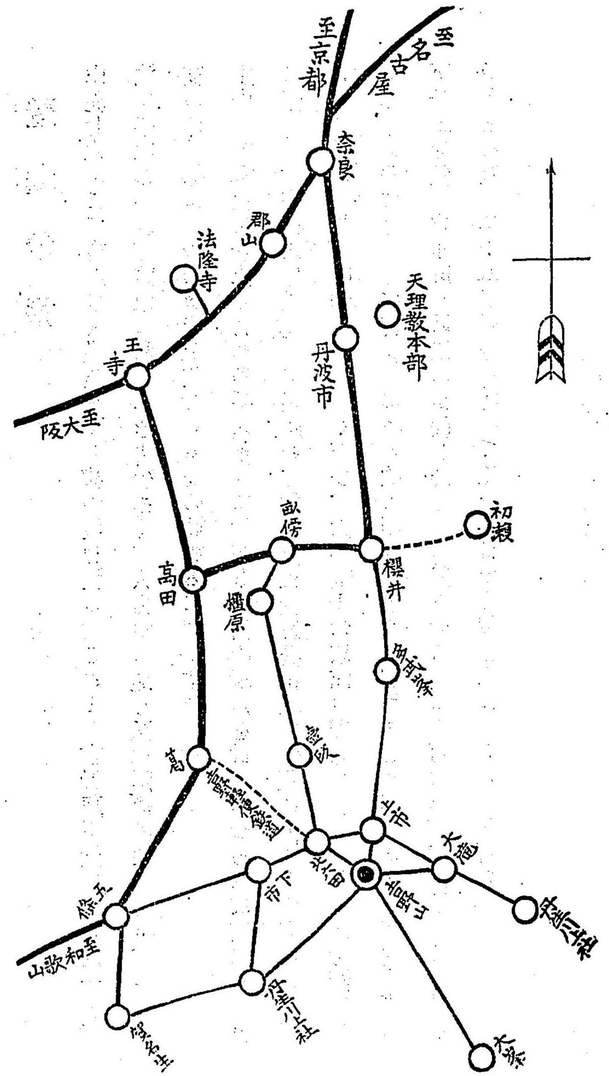
物産

杉檜木材及其苗種子、櫻菓子、櫻花漬、櫻細工、吉野葛、花籠、陀羅尼助、法螺貝

登山の栞

山麓北六田にて吉野輕便鐵道を下り柳の渡を渡る。これより吉野藏王堂に至る約一里、途中路阪多かれど峻阪と稱すべきものなく、人力車も通じ又山駕籠の便もあり、されど徒歩にて徐に途中の風光を賞せらるゝの勝れるに如かず。

上中下千本は勿論他の公園の手入年々に行屆き櫻樹の增殖を計りつつあれば花は年と共に芳しく、眺は之に正比して益勝る、加之夏は大峯登山秋は紅葉に集ふ人の多ければ、これに應ずべき旅館の設備もよく整ひ、大小數十の旅館料理店を有し、其の他寺院にても參籠を許すを以て如何ある場合と雖も不便を感ずるが如きこと萬あるなし。觀光者は下千本を賞し吉水神社塔尾の御陵を拜して日歸りせらるるも可なれど、一泊して金峰水分の神に賽し奥千本西行庵を訪うて悠々一日の淸遊を恣にせらるゝ又可なり。



古蹟名所

吉野川

吉野川は源を大臺ヶ原山に發し、西流して紀伊に入り紀の川となり紀伊水道に注ぐ。流程約三十里。上流は流水の石に激し岩を噬み、急瀬碧潭相連り奇景多し、中にも大瀧柴橋萊摘音無川等の勝景最も著はる。

この川には鮎の産多くして櫻鮎の名世に高く、夏季遊漁の客少なからず。有名なる吉野材木(年額二百餘萬圓)の大部分はこの川によりて搬出せらる。

光明峯寺入道

吉野川岩もと櫻咲きにけりみねよりつゞく花の白ゆき

山田永年

徹天王氣已寥々　五百春秋日月遥　猶是芳山山下水　聲々鳴咽哭南朝

大鳥如楓

路入和州林壑間　遺蹤名勝好登攀　湯々芳野一溪水　隔斷夫妻兩岸山

柳之渡（六田）

大淀村大字北六田を、吉野村大字六田間吉野川の渡にして、昔時附近に柳樹多かりしを以てこの名あり。この渡は傳法阿闍梨聖寶僧正（大峯中興の祖理源大師）のはじめて設くる所、六田は古六つ田の淀といひしところなり。

この渡は櫻の渡（上市）、梅の渡（瀬上）と共に古來三渡とて有名なり。

櫻咲く水分山に風吹けばむつ田の淀に雪つもりけり　大貳重家

一之阪

柳の渡を渡り六田を經て吉野に向へば四五丁にして急阪あり。一の阪といふ。

みよしのや櫻一木に先見せて山口しるく匂ふ春風　飛鳥井雅章

長峯（吉野八景の一　長峯彩霞）

一の阪より下の千本に至る二十餘丁の峯つゞきをいふ、道路の兩側に櫻の並木多くして

花時花洞を行くが如く、片々たる暖雪を玩びながら左顧右眄絶景を賞せば登阪の勞も忘るべし。

吉野山消ねせぬ雪と見ねつるは嶺つゞき咲く櫻なりけり　讀人知らず。

歌塚

吉野宮より一丁ばかり下道路の左側にあり。西方遙に金剛葛城の諸山を眺め、北方近く龍門高取の連峯と對し、吉野の清流は足下をめぐり眺望甚だ佳にして、自一句を禁じ得ざるべし。

金剛山　大和河内の境上に跨り、海拔三九七三尺、山腹に楠公の城址あり、頂上に登れば近畿大半の景象を望眺に收め得べし

葛城山　金剛山の北方に連り、海拔三七〇〇尺、山中に清瀧あり柳羅瀧といふ

龍門岳　山中に竜門瀧あり

高取山　植村氏（高取藩）の城址あり、附近一帶は高取官林なり

高見山　伊勢大和の境に屹立す、海拔四三三三尺

月雪に流れてやまぬよしの川　芭蕉

東北眼下に見ゆるは飯貝丹治(吉野村)上市町(吉野郡役所々在地)なり

吉野川畔の森は子守神社なり

吉野宮

明治二十二年六月二十八日、神殿を創立し後醍醐帝を齋祀り、本殿の左右に攝社として左の人々を祀る。

御影社 (贈從三位 藤原資朝 / 贈從三位 藤原俊基)

船岡社 (贈正四位 兒島範長 / 贈從三位 兒島高德 / 贈從四位 櫻山茲俊)

瀧櫻社 (贈正四位 土居通增 / 贈正四位 得能通綱)

官幣中社たりしが、明治三十四年八月十三日官幣大社に御昇格あらせらる。輪奐宏大結

構裝麗にして、花梢の間白木の宮居神々しき、自崇嚴の感にうたるべし。

こゝは丈六山一の藏王堂址なるを以て丈六平の名あり、元弘の亂賊軍の陣せしところなりと。

寶物の中後醍醐帝御製の色紙『ながらふるかひこうなけれあふことの、かへぬ命ののこるつらさは』、小楠公の甲冑は其の主なるものなり。

峯の藥師堂址

吉野宮より上ること八丁餘、道路の右側にありて昔時結構壯麗を極めたりしが、維新の際廢頽す。

この邊に豐公觀櫻の際、大和中納言秀俊卿の設けられし松山茶亭の址あり。

吉野山梢の花のいろいろに驚かれぬる雪の曙　豐公

村上義光の墓

藥師堂址の傍松檜の茂れる小阜の頂上に義光の墓碑あり、君が沒後幾百星霜の間榛莽に埋れ、虫聲僅に英魂を弔ふのみなりしが、明治四十一年十一月陸軍大演習の際、陛下そ

の功を追賞し、特に從三位を贈らせ給ひ、後これが營繕をなせり。

村上義光は信濃の人彦四郎と稱し、左馬權頭たり。陸奥守源頼清の後、彌四郎信泰の子なり。元弘の亂に大塔宮に從ひて十津川に逃れ、戸野兵衛竹原八郎に頼る。熊野別當定遍之を案むること甚急なりければ、宮は逃れて吉野に落ち給ふ。時に土豪芋瀬莊司兵を以て途に要せしかば、宮は之に錦旗を賜ひて僅に過ぐることを得給へり。義光偶遑に後れたりしが、莊司の錦旗を荷ひかへるに逢ひ、進みて旗を奪ひ、旗を持ちたる大男をつかみて田中に抛げて漸く宮に追ひつき奉る。既にして吉野に城きて之に籠る。元弘三年正月(紀元一九九三年)賊將二階堂道蘊大兵を督し來り攻むること七日にして拔く能はず、時に當山の執行岩菊丸といふもの、間道より敵を導きしかば宮は自ら敵に當り力戰し給ひしかど前後に敵をうけて及ばず遂に軍に敗し給ふ。(四本櫻記事參照)時に義光宮の鎧裝を賜はり、宮に代りて自刃す

忠烈碑

元弘之亂大塔王出據吉野東師圍之七日不克東人宵潛入金峯昧旦三覆齊起皷譟而進王掇甲出戰身被七矢流血及屨未拔遑矢還入藏王堂立飲于庭中小寺相模斬一人挂首劍鋒歌且舞邨上君諱義光棄敵走回謂王曰彼熾我潛臣願賜王鎧衣代王而死王曰死則同所君厲言固諫進解王衣登樓呼曰神孫帝子今已自裁若等蠢　死亦不久志以爲法說甲投下刳腸擲壁衝鋒而俛東師大驚解圍爭獲王逸君子義隆見君臨死與俱君曰叱若衛而君義隆乃從王鬪殺數創走投竹中屠腹而斃王適高野遂斷渠魁嗚呼方王事多難君之忠烈百世之後夫婦之愚尚猶誦之景文每及之未嘗不髮上乃樹貞石于此以勒大節辭曰諫則屈誨則信得仁哉若人由義哉若人

天明三年冬十月

高取　内藤景文子武立

加藤　千浪

君がため散るや吉野の花矢倉たかき其の名は今も匂へり

一目千本

口の千本又は下の千本ともいふ、花時彩雲谷を埋め、山をめぐり、爛熳たる光彩は目を奪ひ、馥郁たる香氣は天地を薫染し、人心をして恍惚春風と共に飛揚せしむ、日本が花の稱又空しからずといふ可し。

明治二十三年四月二十一日　皇后陛下當山行啓の御時、この絶景を賞せられ暫く御野立せらる。

路傍に刻せるは

吉野にて櫻見せうぞ檜笠　はせを

下に見ゆる老杉の森は幣掛神社にして、大峯登山の一の行場なり。

こゝぬまは吉野の山の櫻花人傳にのみきゝ渡るかな　紀貫之

古里はよしのの山も近ければ一日もみ雪ふらぬ日もなし　讀人知らず

吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり　八田知紀

よしの山八重立峯の白雪に重ねて見ゆる花さくらかな　藤原清家

何れをか花とはわけてなかめましなへて櫻のみよしの〻山　本居宣長

よき人をよしとよくみし夕よりよしの〻花のおもかげにたつ　香川景樹

みよしのは櫻も櫻歌人の言葉の花も山をなす山　宿屋飯盛

もろこしの人に見せばやみよしの〻吉野の山の山さくら花　加茂眞淵

これはこれはとばかり花の吉野山　眞室

花さかり山は日ころの朝ぼらけ　松尾芭蕉

嵐山

路の右側にあり、京都嵐山の櫻樹は、龜山天皇藏王權現を勸請して、こゝより移植し給

ひしものありと。

因に甲斐金峯山の櫻も吉野より移植せしものなりと。

嵐山これも吉野や尋ね見んさくらにかゝる瀧の白糸　讀人知らず

追分の辻

元弘の亂賊軍ここに攻め上りしを以て、攻が辻とも云ふ。北面して岐路を右に取れば飯貝上市を經て多武峯に至り、櫻井停車場に達し、左すれば六田壺阪を經て畝傍御陵橿原神宮に至り、又下市五條及び高野山和歌山に通ずべし。東北に見ゆる船形の山を、御船山又は船岡山といふ。

みよしの〻御船の山に立雲の常にあらんと我思はなくに　柿本人丸

七曲（吉野八景の一　七曲の曉櫻）

幣掛神社より下の千本櫻間を縫うて、攻が辻に至れる崎嶇たる坂路をいふ。花時仰視すれば香雲遙に天に連り、美觀いふばかりなし。

仰き見れば空にもつゞく花をなど一目千本と誰限りけん　頼惟柔

大橋

又一の橋ともいふ吉野三橋の一たり。擬寶珠に慶長九年甲辰十一月豐臣秀頼公再修云々の銘あり。明治四十三年二月修繕す。

隠れ松

陽春櫻花滿開せばこの松花に隠るゝが故にこの名ありと。吉野勝景圖には笈立松とあり俗に義經のかくれ松といふ。

盛りなる花にかくれて名もしるく立つるやいつこみよしの〻松　飛鳥井雅章

關屋の櫻

大橋より黒門までにある櫻をいふ。往時こゝに關を搆へし故にこの名あり。

吉野山誰とむるとてはなけれども今宵も花のかげにやどらん　豐公

黒門

金峯山寺の總門にしてこれより人家ならびつゞく、維新以前この門内は大名と雖伏槍下乘して通行せしといふ。

銅の鳥居

黒門より一丁ばかりの處にあり。高二丈五尺、柱周一丈一尺餘。相傳ふ聖武天皇奈良東大寺大佛鑄造の餘剩を以て造ると。一説には醍醐帝の昌泰元年（紀元一五四九年）に建立せられしとも云ふ。額面の發心門の三大字は、聖武帝の御宸筆とも弘法大師の筆とも

いひ傳ふ。明治二十一年七月二十三日、暴風の爲め倒れしを全二十八年四月再建し以て舊狀に復せり。

金峯山寺四門の内、修行門は金峯神社にあり、等覺妙覺の二門は昔時大峯山にありしが今は額のみ藏王堂の寶庫に納む。

夢さめて其の曉をまつ程の闇をもてらす法の燈　藤原光敦

藤尾坂

銅の鳥居の南半丁にあり。俗に藤井坂といふ。文治元年十一月十七日、源義經の愛妾靜義經と別れてこの坂を下り藏王堂に來りしを、吉野衆徒之を怪み捕へたりと。

みよしの〻峰の白雪ふみわけて入りにし人のあとゞ戀しき　靜

仁王門

又大門といふ。藏王堂の山門にして、後花園帝の康正年間の建築にかゝり、桁行八間餘梁行五間餘あり。左右に密迹金剛の兩力士を安置す、共に身長一丈六尺餘、運慶湛慶の作と云ひ傳へ、刀琢眞に迫れり。風鐸の銘に康正二年九月二十日（紀元二一一六年）とあり、他に一個を存し藏王堂の寶庫に納む。

花見塚

仁王門より谷を隔てゝ東方（左）の山腹人家のある邊を花見塚といふ。文祿三年三月一日豐大閤御登山の砌、こゝより觀櫻せられしを以てこの稱あり。この處一本の老櫻ありて、當時の名殘を止めしが、明治四十四年六月の暴風のため倒れぬ惜い哉。

紀友則

みよしのゝ山邊に咲ける櫻花雪かとのみぞあやまたれける

吉野皇居金輪王寺趾（實城寺）

仁王門より右一丁許にして西の尾にあり、延元元年十二月二十一日（紀元一九九六年）後醍醐帝當山に潛幸し給ひ、先づ吉水院に入らせられしが、やがて當寺を以て皇居とし給ひ金輪王寺御所と稱す。延元四年八月十六日天皇この宮に崩し給ひ、皇太子御即位之を後村上天皇と申し奉る。權大納言藤原實世、權中納言藤原隆資政を輔けて遺詔を天下に宣す。されど殿閣未だ整はず、月卿雲客微少にして、昇進除目殆ど斷絶せんとす、こゝに於て興國二年二月下旬源親房常陸小田城に居して、職原抄二卷を作りてこれを獻じ奉る。正平三年正月高直師大舉來襲するに及び帝は賀名生に御幸し給ふ、賊乃ち皇居に火を放ちしかば、月卿雲客の宿所殘る方なく燒失せり、間もなく當寺を再建して生木の御所なるに及び、屢々皇后を此處に定め、大いに皇威を張り給ふ、又時に吟哦の清遊を絶たず、天授二年、千首和歌會あり百番歌會等の御催ありきとぞ、

慶長十九年甲寅霜月、德川家康大阪在陣の節、當山は要害の地にして、寺院の勢力亦旺盛ありしかば、古來屢々之に據りて、事を爲さんとするもの多かりしを患へ、南光坊天海をして當寺を修繕せしめ、實城寺と改稱し、金輪王寺を日光に遷して、宮門跡の稱號を附し、天海僧正を金峰山寺學頭とす、以來吉野は日光の支配地となりて、維新の改革

に至るまで、事皆學頭の與るところとなりき。當時京都所司代及天海僧正より下したる制札の文に曰く。

禁制　和州吉野山、一諸軍勢甲乙人濫妨狼藉之事、一武家牢人寄宿之事、一修理領並寺領當納所致難澁事、右條々堅被停止訖若違犯之族於有之者速可被處嚴科之旨依仰知如件

慶長十九年霜月十九日、板倉伊賀守判　南海坊僧正判

明治八年廢寺となる、誠に惜むべきなり、寶物等數多ありしが、今は吉水神社及藏王堂に藏せり、前方中央の小高き地は御靈殿の跡ありと、

後醍醐帝御製　都だにさみしかりしを雲はれぬ吉野のおくの五月雨の空

歌書よりも軍書にかなし吉野山　　支考

疊々春山別有天　花開花落銃依然　羊腸險惡君休怒　看護南朝五十年　　賴山陽

芳野竹笛歌　　賴山陽

有客手裡橫紫玉、就視篋笈疑者絲、吹之一曲聲悲怒、如蒼梧之猗不北還、淚亂湘雨斑痕簇、又如堅帝之魂啣百鳥、啼裂山竹夜濺血、問客何處得此物、迺元天子古殿屋、敗樑敢摩柯亭收、一條龍髯寄臍間、長舌有靈君樂聽、短夢重失中原亂、劍器渾脫始犯蹕、七道戰伐沸野哭、圍城開笛非無人、凝碧管絃長胡出、君不見芳野山中頭白烏、畢竟似呼返閑速、吉語誤人入歌詞、空止殿屋倪且啄、龍顏仰屋曾按劍、王氣或寄一尺竹

藏王堂（吉野八景の一、金峯の杜鵑）

金峯山寺の本堂にして山內第一の巨刹なり、十八間四面、高十一丈二尺、重層、入母屋造にして、棟梁柱楹の類堅牢巨大の良材を集め、建築宏壯なり、中にも長さ三丈五尺周一丈三尺の神代杉の柱、長け三丈一尺周八尺の躑躅の柱は特に珍物なり。

本尊は金剛藏王權現にして、御丈二丈六尺、二丈四尺、二丈二尺の木像三軀、着色立像なり、聖武天皇の天平年間僧行基、勅を奉じて大峯山上に、勅筆の經卷並に光明皇后の御親筆の經卷を埋藏するや、此時山上本堂の大破を修繕すると共に、役小角自作の藏王權現を摸造して、こゝに藏王堂を建立し永く鎭護國家の道場と定む。

抑も金剛藏王權現と申すは昔役小角大峯山に籠りて、濟度利世の爲め薩埵の出現を祈り

し時、初め柔和忍辱の地藏菩薩出現せり、小角乃ち未來惡世の衆生を濟度せんには、かゝる狀貌にては畏敬し難しと申しければ、此時磐石振動し、大勢忿怒の像、忽然として湧出し、右手には三鈷を握り、左手は五指を腰に當て、一睨大いに怒り惡魔降伏の相を示し、右脚を高く擧げて天地經緯の德を呈し給ふ、小角大に歡喜し敬重して奉崇し、影像を木に模し一小堂を建てゝ安置す、之即その始なり。

元弘三年、大塔宮吉野御籠城の御時此處を本陣とし給ひしが、軍利あらず、賊將二階堂道蘊大擧亂入して之を燒く、延元元年再建せしが、正平三年高師直吉野皇居を犯せし時兵燹のため燒失す、現今存せるものは康正元年の建立天正十九年豐公の大修繕にかゝるものなり。

去程に武藏守師直、三萬餘騎を卒して吉野山に押し寄せ、三度鬨の聲を揚げたれども敵なければ音もせず、さらば燒き拂へとて、皇居并に卿相雲客の宿所に火をかけたれば、寛風盛に吹き懸りて、二丈一基の笠鳥居、二丈五尺の金の鳥居、金剛力士の二階の門、北野天神示現の宮、七十二間の回廊、三十八所の神樂屋、寶藏、寢殿、三尊光を和げて、萬人頭を傾くる、金剛藏王の社壇まで、一時に灰燼となりはて、煙黄天に立ち上る、あさましかりし有樣なり。（大平記）

寶物には、千手千眼觀音畫幅（兆殿司筆）、大峯山にて發掘鍍金經箱（國寶）三個、釋迦立像（世尊寺本尊）、阿難迦葉立像（傳云世尊寺脇士、仁王門力士風鐸、其他種々あり。境内に觀音堂經堂鐘樓等あり、毎年四月十一十二の兩日こゝに盛大なる、花供法會式行はれ京阪地方より群集するもの多し。

四本櫻

藏王堂の前庭にあり、元弘の亂護良親王最後の御酒宴を催されし所なり。

親王親ら職ひ給ふこと數度、退いて左右と此處に最後の御酒宴を開き給ふ、宮の御鎧に立所の矢七筋、御頸さきに二の御腕二箇所つかれさせ給ひて、血の流るゝ事淵の如し、然れども立ちたる矢をも拔かず、流るゝ血をも拭ひ給はず、數度の上に立ちながら大盃を三度傾けさせ給へば、小寺相摸四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫きて、宮の御前にかしこまり、戈鋒劔戟を降らす事電光の如くなり、盤石岩を飛す事春の雨に相同し、然りとはいへども、天帝の身には近づかで、修羅かれが爲めに破らるゝ、はやしを揭げて舞ひたる有樣は、漢楚の鴻門に會せし時、莊の項伯と項莊とか、劔を拔きて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかかげて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり、村上彦四郎義光、殿に立處の矢十六筋、枯野に殘る冬草の、風に伏したる如くに折り懸けて、宮の御前に參りて申しけるは、大手の一の木戸、いふがひなく攻め破られつる間、二の木戸に支へて、數刻相戰ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲、すさましく聞ゆ候ひつるにつきて參りて候、敵既にかさに取り上

げて、御方の氣の疲れ候ひぬれば此城にて功を立てん事、今は叶はじと覺え候、未敵の勢を餘所へ廻し候はぬ前に、一方より打ち破りて、一先づ落ちて御覽あるべしと存候、但し跡に殘り留りて、戰ふ兵なくば、御所の落させ給ふものなりと心得て、敵いつくまでもつゞきて、追懸け進らせんと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と御物具を賜はりて、御輦の宇を冒して敵を欺き、御命に代り進らせ候はんと申しければ宮いかでかさる事あるべきぞ死なば一所にてこうと仰せられけるを、義光かかるあさましき御事や候、洪の高祖榮陽に圍れし時、紀信高祖の眞似をして楚を欺かんと乞ひしなば、高祖是を許し給ひ候はずやとて、御鎧の上帶を解き奉れば、宮げにもとや思召しけん、御物具鎧直垂を脱きかへさせ給ひて、我若し生きたらば汝が後生を吊ふべし、共に敵の手にかからば冥途までも同じ岐に伴ふべしと仰せられて御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南に向ひて落させ給ふ、義光二の木戸高櫓にのぼり、遥かに見送り奉り、宮の御後影幽かに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓のさまの板を切り落ぼ、身をあらはにして大音聲を揚げて名のりけるは後醍醐天皇第三の皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣のために亡され、恨を泉下に報ぜんために、只今自害する有樣見置きて、汝等が武運忽に盡きて、腹を切らんとする時の手本にはよといふままに、鎧を脱きて櫓より下へ投げおとし、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押寛脱ぎて白く清らげなる腹に刀をつき立て、左の脇より右のうば腹まで一文字に掻き切りて、腹掴みて櫓の板になげつけ、太刀をくはへて、うつぶしになりてぞ伏したりける、大手搦手の寄手是を見て、すはや大塔宮の御自害あるは、我先に御首を賜ふらんとて四方の圍を解きて一所に集る、其間に宮は引き遂へて、天の河へぞ落ちさせ給ひけり。（大平記）

威德天神社

藏王堂の側にあり、天慶四年八月一日、日藏上人、大峯山の笙の岩窟にて假死のうちに延喜帝の臨幸に逢ひ奉り、菅公の廟を建て化導利生を專らにすべしとの勅宣ありければ上人具に承りて堅く領狀申すと思へば仝十二日蘇生し、此處に廟を建てて菅公を祀ると云ふ、扶桑畧記元亨釋書にも天慶四年沙門道賢（日藏上人）の菅公を祀りて禮拜したる由見ゆ。

稻荷社

藏王堂の石段の東傍にあり、延元元年十二月、後醍醐天皇南遷し給ひし時、導き奉りし稻荷を祀る。

後醍醐帝、花山院をひろかに出御ならせ給ひて大和のかたへおもむかせ給ひけるに、いとくらき夜なりければ、御供にさふらひける人々いかにせんとわびあへるをきかせ給ひて、ここはいづくのほどにやとたづねさせ給ひければ、忠房の侍從（千種忠顯男）いなりの御社の前にこうと奏し給へば、御歌「むば珠のくらきやみぢにまよふなり、われにかさなんみつのともし火」とて伏し拜ませたまひければ、御社の上より、いとあかき雲一むら立出で來て、臨幸の道をてらしおくりて、やまとの内山にいらせ給へば、雲ぱ金御掛（吉野山）の上にて消失にけりまさしく御供に侍りて見しことにこそ。（吉野拾遺）

葦駄天山

吉野三山の一にして、眺望佳なり。昔此處に、韋駄天明神の社ありしを以て此名あり、頂上に故宇智吉野郡長玉置高長の碑あり、明治二十二年玉置郡長十津川巡視の際、大洪水に遭ひ斃れしかば、郡民其の德を表彰せんがため、ここに其の碑を建つ。

東南院

當院は金峯山寺の一院にして、天台宗山門派に屬す、役小角の開基にかゝり、累代高德の師の輩出したる名刹なり。中興日圓上人求法のために入唐し、唐廷の歸依を得て、經卷法器を賜はり、歸朝後有緣の社寺に寄贈せらる、金峯山什寶中唐鈴も其の一なり。後醍醐天皇の侍從僧聖尊上人は、關白大臣鷹司基忠の男にして、延元元年、天皇に隨從して吉野に入り、當院の住職となる、後敵手に捕へられ、下野の獄屋につながる。

吉水神社（吉野八景の一吉水の廻月）

元吉水院と稱し、天武帝の白鳳年中役小角の創立にかゝり、金峯山寺の一院たりしが、明治八年吉水神社と改稱し、後醍醐天皇及び楠正成を祀る。延元元年十二月二十一日、後醍醐帝當山に御遷幸ありし時、初めて此處に入らせられ、金輪王寺と共に長く吉野廷の行宮とし給へり。往年の玉座、御座所に敷きたる高麗緣の御疊、翠簾、綾の几帳等はそゞろに當時の御有樣を偲ばる。

文治元年源義經、賴朝の勘氣を受けて、此處にかくれ、文祿三年豐太閤も宿泊せられしを以て、義經潛居の間、辨慶忠案の間、豐公の寄贈物等あり。

門內に辨慶の力釘あり。庭園狹小なれども雅趣に富み、竹林院の群芳園と共に、當山中の雙美なり。寶物多きが中にも國寶とされる頌文紙本墨書（傳に後醍醐帝御宸筆と）一卷、義經所用色々威腹卷一領は其重なるものなり。

後醍醐帝御製

花にねてよしや吉野の吉水の枕の下に石はしる音　本居宣長

神代よりたふとき山といでましの宮しろしけむみよしの〻山　東久世通禧

中興偉業亂如麻　雪暖行宮萬朶花　遺恨南巡駕不返　帝家幾歳托僧家

梁川星巖

今來古往事茫々　石馬無聲抔土荒　春入櫻花滿山白　南朝天子御魂香

當院に宗信といふ高僧あり、法印に叙せらる。元弘元年護良親王の吉野に據り給ふや、宗信等之を助く、城陷るに及び、宗信親王に從ひて逃れ、亂平ぎて又當寺に歸りぬ、延元元年十二月、後醍醐天皇花山院を出で、賀名生に入り給ふや、宗信吉野衆徒を語らひ、藏王堂に集會し、若大衆三百餘人甲冑を帶して御迎に參り、遂に蹕を吉野に止めさせ給ふにいたれり、延元四年八月、帝崩御ぜらるゝに及びて、衆情沮敗して退散隱遁の念ありしかば宗信大に之を激勵し、御遺勅に任せて後村上帝を御位につけまゐらせ、國々へ綸旨を下さるべし、身不肖と雖も宗信ある間は、當山に於て又何の御怖畏か候べきと申しければ、諸卿皆實にもと之に從ひぬ、吉野廷の久しき勢威を保ちしもの、宗信の力與りて大なりと知るべし、傳へいふ延元帝皇女を降嫁し、一子を生めり、即ち譯の字を賜りて猿丸丸といふ。

後醍醐帝延元二年春正月の末、法印に給ひける御歌に

みよしのの山の山守こゝとはん今いくかありて花はさきなん

宗信答へて

花さかん頃はいつゝも白雲の居るなしるべにみよしのの山

吉野鑛泉

吉水神社前を右に下れば三丁ばかりにして、含鐵炭酸泉あり。皮膚病等に効あり。

元櫻本坊（西本願寺說敎所）

大海人皇子吉野に遁れて、日雄寺にゐませし折、一冬櫻花嬌研春三月の如きを夢み、翌朝前の山を見給ふに、一老櫻艶然として開けり。皇子怪しみ、之を角乘（役小角の高弟）に判せしめ給ふ。角乘答へて曰く、櫻花は花中の王なり、これ殿下來春天下に光榮を發し給ふの兆なり云々と、果して其の言の如かりしかば、白鳳二年九月、勅して冀の夢後に見給ひし櫻樹の下に、一寺を創營し、角乘の子角仁に給ひ、櫻本坊と稱し、金峰山寺中錚々たるものありしが、明治十二年本派本願寺の說敎所となる、當山有數の巨刹にして、壁畫、襖等內部の裝飾壯麗あり。寺內に聖德太子の立像を安置す。

勝手神社

祭神

忍穗耳命、大山祇命、久々廼智命、木花咲耶姫命、苦虫命、葉野命の諸神を合祀す。

舊誌には勝手神社は吉野八大神祠の一にして、吉野の首、井光の祖受鑒命を祀る所といひ、吉野舊記には昔神功皇后の御時勝手と號したりとあり。

正平の役、後村上帝、金輪寺御所を立ち出で、賀名生に落させ給ふとき、社前にてこの度の戰にことよせ。

賴む甲斐なきにつけても誓ひてし勝手の神の名こそをしけれ

源義經の妾靜、この境内に於て、吉野衆徒のために、法樂の舞を演じたるところと云ふ

社前を右へとれば木戸阪を通じ下市、洞川に至る。

袖振山

勝手神社の背後、老樹鬱茂せる山をいふ、天智天皇の十年十月大海人皇子大友皇子を避け、當山日雄寺に入らせられし折、十一月三日、神樂を勝手の祠前に奏し、親しく琴をとつて、御製の國詩を歌はせ給へば、忽ち雲中に霓裳羽衣の天女あり、髣髴として祠後の山に現れ、袖を翻して舞ふ、よりて袖振山と云ふと。吉野禁裡五節の舞是より始まる

天武帝御製

おと女子が乙女さひすもから玉をたもとにまきておと女さひすも　柿本人丸

天女子が袖振山の瑞籬の久しき世より思ひそめてき　爲氏

天女子がかさしの櫻咲きにけり袖振山にかゝるしら雲　藤原定家

幾千代ぞ袖振山の瑞籬も及はぬ池にすめる月かげ

後醍醐帝、豐明の節會をせさせ給へるに、あまりにかたばかりなるありさまを、おぼしなげかせ給ひけるに、袖振山のまぢかく見わたりければ。

袖かへす天津をとめもおもひいでよよしの〻宮のむかしがたりを

と打なげかせ給ひて、月ふくる迄おはしましけるに、御夢さもなく、袖ふる山の上より、しら雲のたなびきて、南

殿の御庭の冬がれし櫻の木末にとゞまりけるに、うれかさばかりおぼしやらせ給へるに、おさめの姿打ちしほれたるが

かへしなば雨とやふらむあはれしる天津をさめの袖のけしきを

となくなく詠じて雲がくれけるを、御覽じおくらせ給ひて、御心ぼそげにわたらせ給ひし御ありさま、わすれがたくこそ、（吉野拾遺）

村上義隆の墓

勝手神社より木戸阪を下りて五町餘、老櫻群生中にあり。義隆は義光の子なり、大塔宮吉野に敗れ、高野山に落ち給ふ時、義隆父の命により、宮に從ひ奉りしが、五百餘の敵兵、後に逼りければ、義隆踏み止まりて之を拒ぎ、此處に討死す時に年十八才。

南より廻りける吉野執行が勢五百餘騎、多年の案内者なれば、道を要りさかに廻りて、打ち留め奉らんと取り組むる、村上義光が子息兵衛藏人義隆は、父が自害しつる時、共に腹を切らんと、二の木戸の榊の下まで馳せ來りたりけるを、父大いに諫めて、父子の義はさる事ならんも、且く生きて宮の御先途を見はて進らせよと、庭訓を殘しければ、力なくしばらくの命を延べて宮の御供にぞ候ひける、落ち行く道の軍、事既に急にして討死せずば宮落得させ給はじと覺ければ、義隆只一人踏み留りて、追ひてかかる敵の馬の諸膝薙ぎては切りすゑ、平頭切りては側ぬ落させ、九折なる細道に五百餘騎の敵を相受けて、半時ばかりぞ支へける。義隆節石の如くなりと雖其　金鐵ならざれば、敵の取卷きて射ける矢に、義隆既に十餘箇所の疵を被りてけり。死ぬるまでも猶敵の手にかゝらじとや思ひけん、小竹の一群ありける中へ走り入りて、腹かき切りて死にけり。村上父子が敵を防ぎ討死しける其間に、宮は虎口に死を御遁れありて、高野山へぞ落ちさせ給ふ。（太平記）

村上義隆之墓誌

吉野山有村上君之墓二焉其在嶺藥師者爲父君彥四郎其在南溪山腹者爲郎君藏人徵之諸書則確乎中古誤立父君碑於南溪過者或疑焉勢人松井延基偶一謁歎曰何者致此鹵莽二君之神必不安矣吾當改製之因謀諸山司伐蓁莽平嶮崖叟樹一碑題其面曰藏人村上君義隆之墓石偉工良大勝舊觀足以發藏人氏光輝矣舊碑移之嶺藥師而使各得其所焉夫當　上塔王嬰守之時賊兵肉薄城將陷二君死以脫　王於虎口　王之他日能鏖滅醜魁安靖　宸襟者皆出於二君之勳績也其忠勇大節戴存竹帛然　天萊一歷　王赤堯于讒毒政權再歸將家者五百餘年矣二君窄城遂將湮晦不亦悲哉方今　王政復舊百僚賢明漸有繼絕興廢之擧異時此墓亦應有旌表之議願延基爲之嘸矢餘深感之慨然遂書　時明治三年庚午秋八月也

翠亭竺全撰

大北温書

中の千本

勝手神社より岐路を左にとれば、三丁餘にして櫻樹の多きところあり、中の千本といふ。近時日露役の戰勝記念櫻樹林の、この地を相して設けらるるありて愈其の美を加へ、花時天蹤に吼ゆる塔尾山の松柏に映じ、其の美觀敢て下の千本にゆづらず。

老鼠堂　永　機

年々に花にかくるゝ吉山野
　みよしのは花より外の色もなし櫻を山の姿にはして

佐々木弘綱

宮原龍

攀坂度橋移端節　穿過花影幾重々　偶然吉水門前望　萬朶香雲又一峰

如意輪寺

（吉野八景之一塔尾の暮鐘）

中の千本花の吹雪の散るあたり、羊腸の坂をのぼれば塔尾山如意輪寺に至る。當寺は日藏上人の開基にして、本尊は後醍醐天皇の御信仰厚かりし如意輪觀音なり。寺内に壯嚴なる御靈殿あり、後醍醐帝御自作といひ傳ふる同帝の御木像を安置し奉る。

境内辨内侍の至情塚、正行髻塚、藤本鐵石の碑あり。左方稍高きところに多寶塔址あり、正平二年十二月二十七日楠正行の一族郎黨百四十餘人、塔尾の御陵に參拜して後姓名を記し「かへらじとかねて思へば梓弓をきかずに入る名をぞとゝむる」の辭世を止めたる所といひ傳へ、近時其の再建にかゝれり。

國寶

藏王權現の木像、一軀（役小角の作立像丈ケ二尺七寸五分着色）

同上厨子　一個、（高さ四尺七寸横二尺四寸五分、扉に巨勢金岡の筆吉野八社明神の畫、扉の上に　後醍醐帝御製七言律詩御宸筆あり）

峭窟月前爲敎主、金峰嵐底現藏王、班荊禪客安居砌、緇素群焉滿願望、慈風扇境四流渦、惑霧晴心六道差、碧樹集雲飛窟嶺、黄金敷地契龍華、風月證心文道祖、火雷宥忍法陀尊、日藏聖感夢處、大政天爲敎海繁、兩山梯峻古仙蹟、四流船浮權化神、行積僧祇監未世、威政鬼類縛其身、

其他楠正行の辭世を殘せし扉をはじめ吉野廷の遺物多し。

古陵松柏吼天颷　山寺尋春春寂寥　眉雪老僧時歇帚　落花深處說南朝　藤井竹外

吉野山さかぬ櫻をふり捨てゝあき數に入る身こそつらけれ　藤田東湖

かへらじと征矢もてかきし言の葉に千世をつらぬく君がま心　富岡百錬

楠左衛門尉髻塚碑

正平三年正月　東駕在芳野賊將高師直大擧來寇楠左衛門尉與其族黨百四十三人詣行宮陛辭畢拜訣　後醍醐帝陵入如意輪寺各截髻題姓名於壁然後進戰不克皆死之今茲乙丑之秋益自備中歸鄉將登談山遂遊芳山會津田正臣建石欲以表左衛門尉髻塚來請文益益曰餘且遊二山子姑待之已而登談山謁藤原大織冠廟規摸宏敞殿宇壯麗使人起敬及登芳山首問其所謂瘞

髻處在藝艸寒烟中過者或不知也於是益徊徊不能去潸然泣下曰左衛門尉與大織冠皆　王朝藎臣也而大織冠斃大惡於一擊回天日於將墜位極人臣子孫蔓衍廟食百世左衛門尉則賊討不克以身殉難南風不競宗族殆盡今欲求其遺跡而不可遂得嗚呼何其幸不幸與也已益拭淚以爲其幸不幸雖異其功未嘗不同也夫大織冠回天之績偉矣然比之左衛門尉父子之大節彪炳與日月幷懸存綱常於無窮者未知其孰愈故曰其幸不幸雖異其功未嘗不同也益既歸正臣復來促乃擧前言告之且曰方今夷狄猖獗

九重胥肝士効力　國家之秋也事成則爲大織冠廟食百世不成則爲左衛門尉死節垂名於竹帛豈非大丈夫平日之至願乎正臣躍然起曰是可以表左衛門尉髻塚矣遂書以與之正臣字仲相稱監物世仕紀藩楠中將十八世之裔云

慶應紀元冬十月　大和處士　森田益撰　伊勢　三井高敏書　東京　廣翠鶴鑑

辨內侍　內侍は右少辨俊基の女にして、和歌をよくす。父は北條氏のために葛原岡にて斬られ、母をさへ稚きほどに失ひければ、三位行氏の許に養はれけるが後、後醍醐後村上の兩帝に仕へき。高師直かれてよりこの內侍を慰ひ慕ひければ、或年謀計をもつて吉野の宮より內侍を奪はしめしに、楠正行途にこれを見て、內侍を救ひ、吉野に參りてかくと奏しければ帝これを賞して、內侍を正行に賜はんとせり、正行畏りて「とても世にながらふべ

くもあらぬ身の假のちぎりをいかで結ばん」と奏して辭したりけり。內侍は正行の志に感じて「大君に仕へ奉るも今日よりは心にうむる墨染の袖」と返して龍門岳の南麓なる龍門寺に入りぬ。正平四年正月五日、正行四條畷にて討死ぜりと聞きて、乃ち尼となりて正行の菩提を弔ひきとぞ今西蓮華藏院の境內にある聖尼庵は內侍の住みたりし所なるべしと

塔尾御陵

如意輪寺より右石階をのぼれば、松柏の亭々たる處、塔尾御陵あり。後醍醐帝當山に御遷幸の後、只管啟慮を朝敵征討に惱ませ給ひ、暫も御心の安ませ給ふ折もなく、時の至るを待ち給ひし甲斐もあらせられず、延元四年八月九日より御不豫の御事あり、次第に重らせ給ひけるが、委細に綸言を殘し給ひて、右の御手に御劍を按しさせながら、六夜の月と共に雲隱れ給ふ。寶算五十二　御遺詔により御形を改めず、山鳩色の御衾を召させ、鳥羽院より傳はらせ給ひける三掬といふ靈劍を玉躰に添はせこゝに北向に葬り奉る。謹で拜すれば、建武中興の英主、萬世盡きざるの御怨恨と共にこゝに眠らせ給ふ。萬感交々至り夕を送る鐘の音に、ありし昔を追懷すれば、手自顫ひ、胸自躍り、或慨の涙滂沱として禁ずる能はざるべし。

かくて吉野にては、塔尾の御陵へも御參拜あらせられしが、此の御陵への路は、深き谷に沿へる險しき山阪にて水の音は聞ねながら、雲深くしてさやかにも見ねず、谷の對岸には、老杉生ひ茂りて實なほ暗く、如何なる獸が棲むらむと、物凄きこと言ふばかりなし。供奉の人人すら息喘きて、さもすれば休ひがちなる陛下は、ものともし給はず、徐に玉歩を移して、御陵に登り著かせられ御禮拜の事終りて、やがて行宮に歸らせたまひぬ。

夜に入りて、香川大夫御前に伺候し、「今日はしも、御疲勞さこそと恐察し奉る。さるにても、御陵の路なれば、如何に御驚とたまひつる」申上げしに、「實にも路の險しさは聞きしに勝れり。さはれ此の度は、彼の御陵の參拜を旨として來つるなり。塔尾の御廟のいまうかりし御時の事をし思へば、路の險しきなどは言ふべきにあらず。既に禮拜を終へぬれば、今は心嬉しくて、なかなかに身の疲をも覺ぬ」と宣はせたまひきとなん（聖德餘聞）

皇后陛下の塔尾の御陵にまうで給はんとするをりよませ給ひける

よし野山みさゝきちかくなりぬらんちりくる花も打しめりつゝ

後村上帝御製

思ひ出つる苔のみかけかきくもる涙のしづく袖の上の月

九重の玉の臺も夢なれや苔の下にし君を思へば

新待賢門院

よしの山花に染めつる我か袖もみはがと聞けばうちぬらしけり　　頼惟柔

山禽叫斷夜寥々　無限春風恨未消　露臥延元陵下月　滿身花影夢南朝　　河野鐵兜

今來古往事茫々　石馬無聲杯下荒　春入櫻花滿山白　南朝天子御魂香　　梁川星巖

世泰親王の御墓

塔尾陵の傍にあり、後村上天皇の皇子世泰親王を葬る。

天武帝の離宮址

袖振山の背後一丁ばかり右に取れば日雄寺址あり、天智天皇の十年、大海人皇子大友皇子を避けて此の寺に入らせ給ひ、後長く離宮とし給へり

喜藏院

勝手神社より宮坂を上れば左側に喜藏院あり、金峰山寺の一院にして承和年間智證大師圓珍入峰修行の際、その創立にかゝり、聖護院門跡に屬し、本山三十六先達の一にして本山派修驗入峯の着到所とす。文化年間、光格天皇の皇弟盈仁親王、御入峯の御時、當院に參籠せらる　　盈仁親王

優婆塞がおこなひ置きしあととへばよしのの寺にあり明の月

寛文年間熊澤蕃山此寺に潛匿せり

此春は吉野の山の山守となりてこそ知れ花の心を　　了介

櫻本坊

喜藏院より一丁ばかり上にあり元密乘院と稱す、明治八年神佛判別の際、山內廢寺の諸

佛を本坊に集め祀る、故に諸佛堂の名あり。名作の佛像多し、花供法會の御供は毎年四月十日こゝにて搗く、千本搗とて奇觀なり

竹林院

嵯峨天皇の弘仁九年(紀元一四七八年)弘法大師大峯登山の節、來拜者の爲め、精舍をこゝに營み椿山寺と稱せしが、後常樂山竹林院と改む、醍醐天皇の延喜十六年、三好善行當寺に入りて薙髮し、日藏上人といふ、上人は京都の產、諫議大夫殿中監清行の弟なり道賢と號し又御嶽上人とも云ふ、義經逃れて當山に蟄居せる時、賴朝より追討書を當院に送る。

正親町帝の御宇、當院二十三代尊祐法師は、天資豪邁にして力量衆に絕し、射術を能くし、世に大弓法師と云ふ、竹林流の一派を立つ。

明治二十三年四月二十四日皇后陛下吉野山に行啓の御時、當院を以て行在所となし給ふ庭園は群芳園と稱し、天正年間豐公の命により千利休の築く所にして、後細川幽齋の再築にかゝり、園域廣大にして、閑靜築山のたゝずまひ、水石の配置をもしろく、老櫻其間に介在して陽春を飾り、杜鵑新綠の間に點々して初夏を彩る。又當山の一美觀たるを失はず。

小山神社

竹林院より半町許にして小山神社あり、梵天帝釋天王を祀る、依て前の橋を天皇橋といふ、左の坂は即ち猿曳坂にして、其の上の小高き丘を火見櫓といふ。

道を左にとれば、上千本を經て喜佐谷、櫻木神社、宮瀧、丹生川上神社にいたる。

布引の櫻

猿曳坂の邊にある櫻をいふ

飛鳥井雅章

布引もにじきと見ねてよしの山名にこゐにけり花の一しほ

御幸之芝雨師（吉野八景之一　雨師新緑）

辰之尾坂をのぼれば、老杉巨樫の中に小祠あり、元こゝに獲観音堂ありしが、明治八年之を廢す、後醍醐帝延元四年五月雨の頃、御遊山の御途次こゝまで御幸し給ひけるに、空のけしきいとあやしくなり、雨篠つくばかりなりければ、御堂に暫く立ちやすらはせ給ひて、

ここはなほ丹生の社に程近しいのらば晴れよ五月雨の空

と詠じ給ひしに、雨忽ち止み空晴れわたり、日影うらゝかになりしかば、供奉の月卿雲客等、帝の御德のいみじきに感じあへりしとなん

因に丹生川上神社は川上村迫と南芳野村丹生とにあり、共に官幣大社にして茲より三里餘

上千本

小山神社より岐路を左にとること五丁にして上千本に至る、下中千本と共に櫻樹多く、萬朶の芳雲は四周の濃綠に和し、彩烟谷を埋むるあたり吉野全山は浮島の如く現はれ、棚曳く淡霞に隱現する處其の眺いふ可からず

一目千株花盡開　滿前唯見白皚々　近聞人語不知處　聲自香雲園裏來

菅茶山

横川覺範の首塚

雨師より三丁上れば路傍に横川覺範の首塚あり、覺範は當山妙覺院の僧なり、文治の昔源義經吉野を逃れて多武峯に落ちんとせし時、覺範衆徒と共に之を追擊せしかば、義經の臣佐藤忠信踏止まりて之を中院谷（右手の谷）に射る、衆徒その首をこゝに埋むこの坂を子守坂又獅子尾坂ともいふ、首塚の稍下方に大將軍社址あり。

瀧櫻

元獅子尾坂より上千本の邊一面に老櫻群生して、恰も瀑布の懸れるが如く、壯觀を極めしが、今は其の面影の存するなし。

いかなれば水あき空の瀧櫻花のなみ立つみよしのの山

飛鳥井雅章

咲き匂ふ花のよそめは立ちよりて見るにもまさる瀧のしら糸

本居宣長

花矢倉

獅子尾坂をのぼりつむる處花矢倉あり、佐藤忠信が其の主義經のため、吉野衆徒に當りて防ぎ矢を射しところなり。岐路を左に下れば喜佐谷宮瀧に至る

雲井櫻

花矢倉の傍にあり、後醍醐帝の御製により著名の櫻なりしが、今は枯幹を殘せるのみ

後醍醐帝の御製

こゝにても雲井の櫻咲きにけりただかりそめの宿とおもへど

本居宣長

世々を經て向の山の花の名に殘る雲井のあとはふりにき

世尊寺址

花矢倉より半町上る右側にあり、當寺は其の創立舊く、古來有名のものなりしが、明治八年廢寺となる惜しむ可き哉、本尊の釋迦如來（身丈六尺八寸）は、欽明天皇の十四年、和泉の海中にありし放光樟樹を以てつくられ、其の作素朴にして高雅なり、今は藏王堂の寶庫に納む、此處に古鐘あり、吉野三郎と稱す、銘に曰く、

金峰山寺洪鐘、保延六年庚申十二月二日、播磨守平朝臣忠盛施入云々

鷲の山御法の庭に散る花をよしの〻嶺の嵐にぞ見る

瓦經

賴政の月見ところや五月盡

寶井其角

式内吉野水分神社

祭神

右　天萬栲幡千々姫命、瓊々杵命、玉依姫命

正面　天水分神

左　高皇産靈神、少名彦命、御子神

創立年月詳ならず、初め吉野八大神祠の一にして子守明神と稱し、吉野首の祖神なりと

仁明天皇承和七年十月授從五位、清和天皇貞觀元年正月廿七日授正五位、後醍醐天皇延

元二年正月十日授正二位

慶長三年八月、豐太閤社殿改造中毫去せられしを以て、仝五年秀頼公奉行建部内匠頭光

重に命じ、神殿以下一切の建物を改造せしめ仝九年九月十一日落成す、現今の社殿即之

なり

本殿　桁行九間、梁行每社二間、流造、檜皮葺

拜殿　桁行十間、梁間三間、單層、入母屋、檜皮葺

幣殿　桁行六間、梁間四間、單層、切妻、杉皮葺

楼門　三間一戸、入母屋、柿葺

回廊　桁行三間、梁間二間、單層、切妻、杉皮葺

幼兒の守護神として古來靈驗顯著にして、秀頼公及本居宣長はこの神の祈子なりといふ

每年四月三日、こゝに御田植式あり

拜殿内三十六歌仙の額は、道光親王の御筆にして、狩野永德の畫くところなりと

國寶

天萬栲幡千々姫命坐像（木造）　一　軀

玉依姫命坐像（木造）　一　軀

吹き拂へ山はよしのゝ秋霧に子守勝手も見わぬかみかせ　讀人知らず

午頭天王の社址

水分神社より上二丁許にして亘杉一本高く天を摩するところ、午頭天王の社祉あり、昔

時鄰國城の鎮守として信仰厚く、老樹鬱茂神威の崇嚴を加へしが、今や其の面影もなく

櫻樹若杉中に點在して春秋の美趣を添ふるのみ

高城山

城山又は鉢伏山ともいふ、元弘二年大塔宮の躑躅城を築き給ひし處にして當時其の用水をひきし樋道及井は今尚存して當時を偲ふ可し、頂上は展望大に開けて高取山を掠めて國中平坦地方を望む可く、又遠く高野諸山と對し、理源大師の大蛇を退治せし百螺岳は近く指呼の間にあり

釋道觀

みよしのの高城の山に白雲はゆきはばかりて棚曳きて見ゆ

慈鎭

高き山ふかき谷こうあはれなれさあらぬ人は音信もせず

金峯神社（吉野八景の一　金峯）

高城山より岩倉遙谷等を左右に眺めつゝ、松並木の間をたどりて八丁許り上れば巨杉老

檜蔓尚暗き中に金峰神社あり、又金精明神といひ、大峰登山者の行場なり、祭神は金山毘古神にして、吉野總領の地主神たり、文德天皇仁壽二年十一月特授從三位、清和天皇貞觀元年正月二十七日授正三位、後醍醐帝延元二年正月授從二位、左の釘拔門より小道を下れは蹴技の塔址あり、文治年間源義經、この塔内に隱れしが、敵勢近き來りしかば逃れて宮瀧を經て西河へ落ち行きたりと、故に隱れ塔といふ、古雅の建物なりしが明治三十九年九月二十日、失火のため燒失せり、惜む可き哉

寶塔院の址

寶塔院は一に安禪寺と稱し俗に吉野奥之院といふ、初め桓武天皇の御世高算上人此處に一塔を建て、後寛平年中僧相應其の側に佛殿を設くといふ。吉野郡舊記に曰く、桓武帝於長岡宮患沈痾巫醫萬法皆不驗也時高算上人在吉野山敕召使則算加持之帝病頓癒故敕感號僧報恩依賴勅而建此塔也則小堂高算之影也。又曰く安禪寺藏王堂有相應和尚開基也

塔堂伽藍老杉の蟲々たる間雲中に聳立し、丹生の妙、建築彫刻の技を極めたりしが、寒煙荒草、今や其基石だになく、僅に苔むす石垣により其の跡を偲はるのみ、本尊金剛藏

王權現の木像及安禪明王の木像は共に藏王堂の寶庫に安置す

青根峯（吉野八景の一　青根の霽雪）

金峯神社の東南五丁ばかりの高峯をいふ、翠巒深谷眼下に集まり、眺望尤も佳なり。

源頼政

吉野川岩瀬の波による花や青根が峯に消ゆる白雲

公實

佐保姫の遊ぶところは奥山の青根が峯の苔のむしろに

苔清水（吉野八景の一　苔清水の時雨）

寶塔院址より下ること四丁許にして潺々の響あり、苔清水といひ又とくとくの清水ともいふ

西行法師

とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほす程もあき住居かな

仝　人

あさくともよしや又汲む人もあらじ我にことたる山の井の水

西行庵、奥千本

苔清水より半町ばかりにして西行庵あり、この處人籟遙に隔り、幽邃閑寂にして一別天地をなす、建久の昔西行法師が俗塵をさけて三歳の星霜を猿麓を友とし幽棲せしも實にやと思はる、庵内に西行法師の木像ありしが今は水分神社に藏す、この邊の櫻を總稱して奥の千本といふ、土地高ければ花期從ておそく、麓の方青葉となりて後開く、

西行法師

吉野山花のさかりは限なし青葉の奥もなほさかりにて

吉野山やがていでじと思ふ身を花ちりぬべと人やまつらん

吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん

藤井竹外

西行庵遺趾在芳山極深處

樵人牧豎語行公　風雨滿山春已空　我覓殘碑不辭遠　行三十里落花中

獨吉野の奥にたどりけるに、まことに山深く白雲峯に重なり、烟雨谷を埋んで山賤の家とところどころにちいさく西に木を伐る音東にひびき、院々の鐘の聲こころの底にこたふ、昔より此の山に入て世を忘れたる人のおほくは詩にのがれ歌にかくる、いでやもろこしの廬山と云はんも又むべならずや云云。

大峯

大峰山は吉野山と共に金峰山寺修驗派の唯一本山にして、今を距る一千二百餘年前、天武天皇の白鳳三年、役優婆塞之を開きて、天下無比の靈場とす、當時我國佛敎の渡來日尚淺く、安心を得るものゐく、强惡にして化し難き衆生のみ天下に滿つ、行者輙ち之が濟度の大願を起し、不食不飢の仙法を學び、纔かに草花樹皮を以て飢を醫し、無人絶境の淨域を擇び、高嶽奇峰全國到る處に止錫して苦修したるも、曾て無塵の露境に逢著せざりしに、偶々大峰山に登り、其の滿願屈竟の靈地たるを發見し、吉野山麓を一の行場と定め、權化の垂跡、佛影の降臨、善神の影向等の遺跡に賽し、苦修練行、遂に大峰山頂に於て、始めて悉地成就を得、藏王權現を感得す、行者大いに歡び、敬重奉崇し、感得の藏王權現を木に摸し、一の小堂を權現湧出の岩上に建てて之を安置し（後世之を稱して湧出嶽と名づく今の山上本堂內陣是れなり）以て難化衆生の濟度に從ふ。

行者の高弟に角仁角乘の二人あり、夙に行者に從て其の衣鉢を受く、行素入滅後二人は優婆塞小角を開祖とし、藏王權現を本尊とし、一の法義を立て、之を弘通し、法燈を繼承し、男は優婆塞戒を女は優婆夷戒を授かり、血統相承す、降て聖武天皇の天平年間、僧行基勅を奉じて入峯し、勅筆の經卷を埋藏するや、此時山上本堂の大破を修繕すると共に、之を摸擬して吉野山に一堂を建て、兩堂交代して勤行せしむ　後、醍醐天皇の昌泰年間、聖寶僧正入峯大いに山上本堂を再建せり、當時既に山頂に三十六坊を有せりといふ盛なりといふべし、然るに天文三年事ありて三十六坊を燒失し、後更に六坊を建つ、今の六坊是れなり、

後水尾天皇の元和二年、金峰山寺塔中小松院住職木食上人、山上藏王堂の朽敗せるを嘆き天朝に奏願し、勅許を得て諸國に勸進を募り大修繕を爲す、勅に曰く「大峰山上藏王堂舍破壞之由候專佛法紹隆厰再興之功尤可爲神妙者也者依天氣執達如件、元和二年九月

十四日、左少辨花押」と、後又元祿四年、更に十方信施の淨財を以て鞘建す、現今の堂宇即ち是にして、桁行九間、梁行八間、屋根總銅板葺なり。

毎年（五月八日開扉、九月二十七日閉扉）諸國有信の僧俗、入峰參詣するもの、數萬を數ふ、實に天下無比の靈區といふべし。

吉野山より登るを本山といひ、行程五里半、其間、新茶屋、百町、蛇原、洞辻等の茶屋ありて少憩するによし、海拔六千二百尺、巨巖怪石聳峙して、斷壁幾千仞、時に白雲朦々脚下に起りて、身は天上に在るの感あらしむ、油懸、鐘懸岩、西瞰、屏風岩、体內くぐり、蟻戸渡り、平等岩、東瞰等最も難所の行場なり。

峯入は宮もわらぢの旅路かな　宗因

大峰やよしののおくを花の果　曾長

有木梯架險崖、拾而登、大巖當面、曰鐘懸衆隘若、曰是可登乎、岩上偶有人、呼曰、不易登、亦可登、乃足據巖角、手執巖頭、蟹行魚貫而進。

金峯山創草記

扶桑畧記別神祇槩云第六代孝安天皇第六年甲午金峰山創草云云、宣化天皇御宇僧聽三年戊午八月十九日蹴蹈山辰巳角崩落乘五雲而飛來

天智天皇御宇白鳳十一年辛未正月八日役行者始登金峰山

紫磨金山記云紫磨金山在大和國治東南百餘里此山積金所成故以名緣起云行者生天竺震旦日域登處々高山行於佛法靈驗初天竺生舍衛國名毘經菩薩次生震旦國號香積仙人于時向東方以三莖黃蓮花遙散致觀念云我機緣深有可行開佛法之處當此花可落尒時三莖蓮花一花落伊與國石辻千光佛淨土一莖落大和國彌勒長大光佛淨土一莖落伯耆國三德山無垢光佛淨土以知三所是機緣深處佛法靈驗之勝地也後生大日本國名曰役優婆塞云云

又云我山有佛法護持軍十九萬騎常護我山佛法衆僧我初中後夜廻院內各見住僧所行善惡給若勤修學二道者即摩頂加護若行盜犯惡事者忽擬宛罰尒時子守知見以手招給即止罰去若一度二度制止若致三度者子守不可見給尒時金剛童子刑罰給也若國王傾我山時二萬騎金剛童

子顯立合國王當行合戰若我山軍陳被落者不可有佛法之名號若佛法有世者我山軍陳不可被落若惡人惡王傾我山者一七日乃至三七日見我在無我山無魔畏何況人間界恣乎故我山是從往昔以來不蒙宣旨之處也但我山一千一百歲之時兵杖當起一千一百五十歲之時亦兵杖可起從此外全兵杖不可起云云

一、御代々帝王御歸依事

宇陀天皇　昌泰三年七月御臨幸以助藪大法師補檢校職令致鎮護國家祈禱即御寄進五百町免田檢校最初也

朱雀院御宇　天慶七年賜七高分藥師悔過官符

村上天皇御宇　天曆三年賜益四至并藥師悔過之官符、應和三年賜益一切雜役皆免之官符

冷泉院御宇　安和二年賜年分度者三人官符

一條院御宇　長德三年檢校藏等賜藥師悔過阿闍梨官符、寛弘三年賜鳥居內水田二十五町餘施入之官符

白川院　寛治六年七月御參詣十二日着御山上御宿坊、承保三年丙辰當山石藏寺被立御塔、承歷三年己未十二月二十六日御供養之勅使右中辨、同四年庚申自十二月二十四日於御塔內護摩五百日、康和三年辛巳紀伊國小倉庄御寄進

鳥羽院　長日大般若轉讀被置百日僧、長承三年比也

後嵯峨法皇　下山藏王堂燒失之時依勅願被造立御躰

一、御代々被送御宸筆并御經佛等事

天智天皇　被送請觀音經奉納供養佛益、六寸觀音像安自處觀自在并益

天武天皇　御願并御願等奉納開敷花王如來益御使觀惠僧正

嵯峨天皇　御守小字經并木空三藏御本尊虛空藏菩薩、奉納毘樓博叉天王益御使昌阿上人、御宸筆法華經奉納普賢菩薩益御使獻憲僧正、弘仁十三年五月御自筆法華經納觀自在菩薩益御使眞禪內供

仁明天皇　金剛頂經大日經瑜伽論五寸大日如來像金幡等奉納毘盧舍那如來益、理趣分并五寸愛染王御躰奉納毘里俱胝菩薩益

文德天皇　仁壽元年三月二十九日法華經十二部奉納寶憧如來益御使石藏西高上人

清和天皇　貞觀十二年庚寅二月六日御自筆法華經并法華佛等奉納佛眼佛母益御使貞元上人　茶羅奉納自身觀世音菩薩益、同十六年五月御本尊并新

陽成天皇　御本尊奉納如來慈護念益御使圓珍

宇陀法皇　寛平二年五月御本尊新金三寸藥師佛并華嚴經奉納除一切憂冥菩薩益御使惟首阿闍梨

醍醐天皇　御自筆法華經奉送寶印菩薩益御使長意僧正、法華經八部奉納持金剛菩薩益御使石崎上人、御自筆法華經奉納般若波羅密菩薩益御使聖寶僧正

村上天皇　天德元丁巳年依御示現御本尊七寸如意輪菩薩御舍利三粒法華經十六部、同二年五月一日奉納金剛拳菩薩益御使心空上人

白河帝　承保三年被立御願寺等事如古注之

鳥羽院　若緣灌頂并一乘寺御願等如上注之

後白河院　治承元年一乘寺并大聖寺有職被置之如右注之

一、公卿歸依之事

御堂關白道長　寛弘四年六月七日參詣于時左大臣正二位種々法施財施願文等有之

宇治殿賴通　寛弘四年八月參詣長和三年甲寅七月十六日子時正二位行招大納言兼春宮太夫云云願文在之果如御願云云、永承七年乙丑七月十一日參詣于時關白從一位行左大臣御願文又果無違云云

後二條殿下師通　寛治二年戊午七月參詣十時內大臣正二位兼左近衛大將御願文有之、同四年八月十日參詣種々財施法施有之色紙法華經一部八卷開結心阿大般若經一部爲永代講讀被安置之願文并禮文有之承德二戊　年

正二位齊信　法興院關白殿息、長和四年五月二日參詣于時正二位行搞大納言兼春宮太夫願文在之

大納言信家　天喜四年七月二十四日參詣願文有之

右小辨廣業(藤原)　願文等有之

大納言俊房　承歷四年七月十二日參詣願文有之、于時正二位行權大納言兼春宮太夫源朝臣

大政大臣雅實　寛治二年戊辰七月二十八日參詣于時右大將歟、康和五年癸未七月二十五日參詣同二十六日於藏王堂御前如法經懺午自折山榊之枝植之等願云云、長治二年乙酉三月十四日山上洪鐘被施入之嘉承元年丙戌七月十八日參詣

右中院大臣雅定　喜承元年七月三日參詣供養物多于時少將

一、僧侶歸伏事

弘法大師

眞雅僧正　瑜祇塔并金泥法華經安置天皷音如嶺、自筆法華經納十一面嶺、

眞濟僧正　大日經安置多羅菩薩嶺

眞然僧正　孔雀經并三衣安置孔雀明王嶺、如法經安置觀世音菩薩嶺

益信僧正　六觀音安置馬頭觀音嶺

聖寶僧正　山上日參大峯修行以三部經并止觀等安置忿怒月尻菩薩嶺、昌泰元年戊午晦日山臥于時年六十四

護命僧正　造五大尊安置降三世嶺五寸大威德安置大威德嶺、

延[illegible]禪　木像戒波羅密菩薩安置戒波羅密菩薩嶺

良辨僧正　大乘經并如法花經奉納般若波羅密菩薩嶺

寛空僧正　金銅發意轉法輪菩薩安置發意轉法輪菩薩嶺

觀修僧正　金銅五寸如意輪安置方便波羅密菩薩嶺

寛朝僧正　曼荼羅二補安置波羅密嶺

善珠僧正　大峯御修行願文等有之

勤操僧正　大乘經奉納不空羅索嶺

貴榮僧正　住鳥住寺鳳角寺

智證大師　大峯修行
惟首座主　佛經安除憂冥嶽
長意僧正　大峯修行凡位時御經奉納寶印菩薩嶽
增命僧正　金銅九寸彌勒送彌勒菩薩嶽、普賢菩薩并延命七寸像安力波羅密嶽
延昌法務僧正　古持經等以石上ノ上人送智波羅密嶽
行尋法務大僧正　大峯修行室岩屋冬籠
日藏上人　延喜十六年二月生年十二歳初入當山梓山寺剃髮云云入山勤修行二十六箇年委如傳
良源大僧正　両界安大安樂不空嶽使定生上人
源心座主　涅槃經如法經奉納虛空藏菩薩嶽使監四上人
相應和尚　三箇年安居
淨藏貴所　安居行業
源信僧都　寛和二年四月五日源信、明禪、覺慶、覺運、慶久、聞生、明察、院源等手自奉書妙法蓮華經各一卷此外道俗男女尊卑老少或書加一句一文一經等或加一部源安金櫃奚置寫其上起率都婆二基又供養滿山衆僧云云下略

明治四十五年三月十五日印刷
明治四十五年三月二十日發行

著作權所有

奈良縣吉野郡吉野尋常高等小學校同窓會長
發行兼著者　中岡清一

大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地
印刷者　濱田正夫

大阪市南區安堂寺橋西詰南入
印刷所　濱田日報社

發行所　奈良縣吉野郡吉野村字吉野山　中岡芳雲堂

889
48

發行所　東京神田區表猿樂町中國・民報社

中國語學校　東京目白新町

中國語學校　東京目白新町

發行兼印刷人　東京神田區表猿樂町中國・民報社代表人　中國・章炳麟

印刷所　東京神田區表猿樂町中國・民報社

中國語學校　東京目白新町

發行兼印刷人　東京神田區表猿樂町中國・民報社代表人　中國・章炳麟

明治四十五年二月二十日發行
明治四十五年二月二十五日印刷

339
48

339
48

025714-000-4

339-48

吉野名所誌

中岡 清一／著

M45

ADC-3248